

## 「灯のたとえ」

2023年04月05日

「灯をともして、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、人に知られず、明るみに出ないものはない。だから、どう聞くかに注意しなさい。持っている者はさらに与えられ、持っていない人は持っていると思うものまで、取り上げられる。」（ルカ 8：16～18）

暗くなると光を求めて灯をともす。灯を器で覆って隠したり、見えないように寝台の下に置く者はいない。高い燭台の上に置いて、周りが見えるように明るく照らし出すように用いる。ここで、譬えている「灯」は「神の言葉」と受け止められる。光である神の言葉は暗闇で輝き、事の真相を明らかにする。神の言葉を教え、託した弟子たちに、御言葉の光を掲げるように勧められた。だから、「隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、人に知られず、明るみに出ないものはない」と言われる。神の言葉の前では、隠れ、秘められたものはなく、全てが露わに、明るみに出される。これは恐ろしい言葉である。人は知られたくないことは隠し、うわべを取り繕っているが、全てが知られているとするなら、とても顔を上げられない。しかし、自らを否定的に捉えるだけでは福音的ではないのではないか。祭司ザカリアは、キリストの到来によって、「これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって / 高い所から曙の光が我らを訪れ / 暗闇と死の陰に座している者たちを照らし / 我らの足を平和の道に導く（ルカ 1：78～79）」と預言している。エルサレム神殿で、幼子イエスにまみえた老シメオンは「異邦人を照らす啓示の光（ルカ 2：32）」と歓喜している。キリストはみ言葉の光として遣わされた。そして、エフェソ書 5章 8節には、「あなたがたは、以前は闇でしたが、今は主にあって光となっています。光の子として歩みなさい」と書いている。私たちは、暗闇と死の陰に座していたが、今や、キリストの啓示の光に照らされ、光の子として歩むことが許されている。御言葉の光を掲げ、暗闇を照らす者へと召し出されている。

次に「持っている者はさらに与えられ、持っていない人は持っていると思うものまで、取り上げられる」と言われた。この言葉は、「灯の譬え」とは結びつかず、マタイ福音書 20章の「タラントンの譬え」で、意味が解かれる。主人が旅に出る時、一人の僕に 5 タラントン、一人に 2 タラントン、一人に 1 タラントンを預けた。5、2 タラントンを預かった僕たちは、それを元手にして働き、倍に増やした。帰って来た主人に、倍のタラントンを差し出すと、主人から「忠実な僕だ」と褒められた。1 タラントンを預かった僕は、失くしたら、主人に叱られると、土の中に埋めておきましたと、1 タラントンをそのまま返した。主人は「悪い臆病な僕だ」と怒り、1 タラントンを取り上げ、10 タラントン持っている者に与え、「誰でも持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる」と言われた。これは、一生懸命働いて、金もうけをしなさいという譬えではなく、また、「マタイ効果」と言われる貧富の格差を生み出す現代社会の現象を譬えたのでもない。神から与えられたタラント（能力）を活用すれば、豊かな人生になる、それが「天の国」に生きる者に相応しいと譬えたのである。与えられたタラントンの少なさに嘆くことが多いが、嘆かず、懸命に「天の国」のために用いて働くことで、更に豊かで、充実した人生が約束されると信じたい。